

おひさしぶりの

Remember



同窓会誌 9

渾沌会

(九州大学芸術工学部・九州芸術工科大学 同窓会)

2006.1.15

●渾沌マークは九大芸術工学部のシンボル。そのデザインは幾度か微調整されたが、最終的には創設期の原型に戻った。

もっぴとっぴのリメンバー、始動。

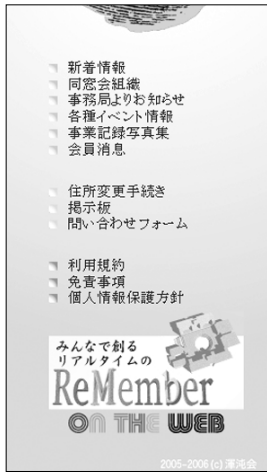
我が同窓会のホームページがリニューアルしました。デザイン公募にエントリー頂いた会員には、ここで改めて感謝申し上げます。みこと当選されたのは牧野さん。見栄えだけでなく、会員相互の真の2ウェイコミュニケーションを目指すデザインポリシーが評価されたもの。そのポイントを、ここに語ってもらいました。



●リニューアルデザイナー
牧野 剛己 (音響27期)

●わかりやすく再編したメニュー

卒業以来の疎遠、デザインに関わるきっかけは仲間との再会でした。



学部を卒業し丸7年、福岡を離れ丸6年が経ちます。郷里の宮崎で、学生の頃より始めた自営をそのまま継続しているのですが、最近、仕事を始めた当初の、展望や目標をひたすら追うという良い意味でのギラついた姿勢がなくなってきたのに気が付きました。ちよつと無理かな?と思えることでもどつにかやり切ってしまう、開拓心が服を着て仕事をこなす、以前のそんな芸工大気質から、クライアントの希望された項目を予算内で正確に淡々とこなしていく、そんな姿勢になってきました。それは、純粹にビジネスに徹するようになってきたからだろうかと思っていました。ですが、実はそうではなかったんです。学んできた芸術工学論を語り合い、お互いを触発し合える仲間がすぐ近くにいなかったからなんです。それは同期の友人と卒業以来の久しぶりに再会した際に、自分の中で痛感しました。そしてこの友人と会った直後、このデザイン公募にエントリーしました。



「ねえねえ、あのさあ...」
そんなとき、いつでも仲間がそこにいる。
そんなサイトを目指しています。

多分、いやきつと、地方で旧友と語り合う機会が少ない中、私と同じように『芸術工学』の看板を背負って業務をこなしている仲間も多い

と思います。“こんなときどつづればいい?これが得意な仲間が今すぐ欲しい!そう思ったとき窓の外に仲間が待っている”その世界を実現させたいという想いから、このサイト構成を企画しました。何かあったら検索エンジンで調べるより、渾沌会サイトで調べる方が早い、正確だし、新しい。そんなサイトになると嬉しいですね。

事務局との2ウェイメディアを超えて、いつかは会員相互のビジネスメディアへ。

渾沌会とはご周知の通り、九州大学芸術工学部・九州芸術工科大学の同窓会を基盤とし、芸術工学を共に学んだ同志が交流を深めるための“発展的組織”です。そうであれば、組織や事業の情報を一般公開するだけでなく、それらが新しく創り出されているその発展過程を一般公開することも、このサイトの責務と考えます。そしてまた、デザインをデザインとして追究するだけでなく、ビジネスとしても捉えることができるのは、渾沌会において他にはないと思っています。これらを踏まえ、会員の皆様のご利用から更なる発展を遂げることを想定し、敢えてデザインを二つに、活用フィールドを拡げてみました。近年のデザインはスタイリングを重視し過ぎ、機能であるプランニングが散漫になってきているように思えます。このサイトは、デザインそのものを問うためにも、プランニングに時間と労力を注ぎました。

サイト制作における「デザイン」の留意点は、
・サーバや閲覧者の環境に配慮した軽くて扱いやすいもの
・個人情報保護法施行に伴う諸規則の設定
・インタラクティブ
というウェブならではの特性を活かした構成の構築です。

運営事務局からのお願い

渾沌会ホームページ(以下「HP」と略称)の運用規約、利用規約および個人情報保護方針は、HP上に明記してあります。使用の際はこれらを遵守するようお願いいたします。

■ 広告募集

HPでは、バナー広告を募集しています。掲載料は当面無料。掲載の希望がございましたら、下記アドレスのHP上からお申し込み下さい。内容は、会員の皆様と関係するものでHPの運用規約に則ったものであれば基本的にOKです。
※掲載の可否については役員会にて審議の上、決定します。

オフィシャルからプライベートまで

幅広い活用が願いです!
いつかは、サーバがパンクするほどに。

『私の仕事』 LIVE版！ 2005

6月4日(土)、今年は盛り上がりすぎの芸術工学座談会でした

環境設計学科テーマ

私の仕事 芸術工学・環境設計からのDNA

語り部：今村滋（12期）Vs 北島佳浩（12期）

まずは、お二人の現在の仕事についてのお話。今村さんは、大林組の開発企画部に所属しており、眺望のよい空間を持った宅地開発などの企画提案やプレゼン、コンペをこなし、その中で、会社に対する自分の立場の確立を意識し、重心主義、現場主義、共感能力を身につけていったそうだ。北島さんは総合設計研究所で、人と自然が手を携えた新たな環境づくりを理念に、多くの景観計画に関わってきたとのこと。最近では、アイランドシティでの景観計画にも携わり、現在のランドスケープと建築との壁の厚さや兼ね合いの難しさを実感したという。



その後、お二人による『選ばれる』組織、人材に

なるには」をテーマにした発表があり、マーケットに対する姿勢、プロジェクト遂行上の姿勢、企画の際の姿勢という3

つのキーワードのもとに、現役学生へのアドバイスをしていた。最後の質疑応答の時間には、学生時代の卒業アルバム制作の苦労話から、2人の現在の仕事でのやりがいなどの様々な秘話？！を聞くことができた。その他にも、卒業生の方などから活発な意見や質問が飛び交い、会は盛況のうちに幕を閉じた。

この会で、最も印象的だったのが芸工大のDNAについての話。芸工大生は、幅広い分野を学んでいることで、すべてのことを様々な角度から見る目を持っているという。つまりは私たち学生が、現在学んでいることが社会に出た後の自分の視野を広くしてくれるというのだ。私を含めて、ほとんどの人が、そんな実感もないままに学生生活を送っていると思う。将来を見据えて学んでいくことで、なにか+αが得られるかもしれないと思うのは私だけであろうか。 レポート/環境34期 鬼頭直美（修士1年）



画像設計学科テーマ

P&I ソリューション

* P: Printing Technology I: Information Technology

語り部：秋重和邦（1期）Vs 後村政勝（1期）
コーディネイト：佐伯正繁（2期）

話の口火は秋重さん。氏の所属する大日本印刷株式会社の事業概要を披露して頂けた。

秋重 大日本印刷の21世紀ビジョンの中では「創発」という言葉がキーワードです。「創発」とは、個性と個性のぶつかり合いが互いに刺激しあい、新しい価値を生み出していくという意味。そして、その21世紀ビジョンのテーマを追求するのが、自分の所属する「C&I事業部」です。DNP（大日本印刷）が誇る印刷技術（P）と情報技術（I）によって、お客様の問題を解決してゆく「P&Iソリューション」を行うセクションです。

1960年代頃まで、印刷会社の殆どが受注産業で、本やカレンダーなどの印刷だけをしていました。しかし、それだけでは面白くないということで、編集や企画、デザインもするという動きがでてきたのです。



DNPは1968年に『クリエイティブデザインセンター』を設立。卒業後

のままなく、私はこの部門に配属されました。芸工大ができたのと、DNPがこの部門をつくったのは同じ年であり、<産業界にはデザイナーが必要>と認識される先駆けの頃です。芸工大に入学したときは思わなかったのですが、今となっては、私はそのような人材を育てるために、この学校ができたのではないかと思います。70~80年代はマーケティング・プロモーションの時代。初めにリサーチをして、どのような商品を作るのかを企画し、プロモーションのためのコマーシャル制作、店舗デザイン、イベント企画なども始めました。芸工大の映像、環境、工業の後輩がたくさん入社してきた時期です。一方、この年代というのは、デジタル化の時代でもあり、文字や画像のデジタル化を図るため、画像設計学科などから技術肌の後輩が参加してきました。このように、DNPでは芸工大の後輩達が、デザイン、マーケティング、技術の各分野で活躍しています。そして90年代からはデジタルネットワークの時代であり、そういった中で『C&I事業部』ができました。デザイン系、文系、技術系の人と一緒にやっていく事業部であり、一緒にないとビジネスにならないという関係です。

『C&I事業部』としての新規事業には、インターネットビジネス、コンテンツビジネス、ユビキタスビジネス、メディア事業開発があります。今回、特にお話したいのが、コンテンツビジネスのコンテンツ流通プラットフォーム事業の事。マーケティングに始まり、デジタルデータ制作、さらには配信から決済をするまでのプラットフォームや仕組みを作り、いろいろな媒体に配信する<D plats>というシステムがポイントです。これを使ってスポーツを携帯でやったり、映画、出版社、音楽などのコンテンツを配信したりしています。私は入社してからも、いろいろなことを学んでなんとかやってこれましたが、「教えられるのを待つのではなく、自ら学び取る」DNAは芸工大の4年間で培えたと思っています。

私の仕事 Live版！ 2005 芸術工学座談会

主催：渾沌会

■ 6月4日(土) 13:00~15:00 5号館, 2号館にて開催

■ 入場無料 ※通常総会：16:00~ 3号館にて開催

5号館 2階

524 教室：工業設計学科
「芸術工学・それはデザインの再定義」

521 教室：画像設計学科
「P&Iソリューション DNP
- IT最前線/大日本印刷 -」

525 教室：音響設計学科
「そこまで話して大丈夫？ 開発現場の内側！
“東芝”ってこんな会社！」

2号館 2階

製図室：環境設計学科
「私の仕事 芸術工学・
環境設計からのDNA」

現在地 ● 正門

3号館 3階

16:00~ 322 教室
渾沌会（九州大学芸術工学部・
九州芸術工科大学同窓会）
2005年度 通常総会

懇親会 同日開催
18:30~20:30
福岡サンパレスホテル
1階 レストラン「サンハウス」
※送迎バスを利用できます
(17:30大橋キャンパス発)
参加費：学生(学生会員)、新卒者...2000円

先輩から後輩へのひとこと



後村 秋重さんが、芸工大を出て大日本印刷に入り、取締役、そして常務をやるということというのは、芸工大のDNAが大日本印刷で重用されているということ

なのでしょうね。本人の努力もあるだろうけど。私の場合、47年に卒業して広告会社（株式会社西鉄エージェンシー）の社長をやっており、みなさんの先輩たちも入社しています。提言したいことは、大人とのコミュニケーションの技術を勉強したほうがいいということです。インターンシップなどに積極的に参加するのもいいと思います。秋重さんはインターンシップについてどう思いますか？

秋重 私は、インターンシップでは学校とビジネスの違いを体験してほしいと考えています。学校はお金を払って学ぶところであり、ビジネスは自分で仕事してお金をもらうところです。同じように映像を作っても学校の場合は作品、会社の場合は商品。それを両方から見るのがいい経験になると思います。

後村 なんで芸工大に入ったのかという情熱をストレートに表現することが大事です。芸工大に入って何をしたかったのかを思い出して、その目で企業や先輩を利用してください。デザインに純粋な情熱をもっている人が少なくなっているんじゃないかという心配があります。

佐伯 私は小さなデザイン会社（株式会社イメージゲート）にいます。仕事となると「自分はここまでしかできないから、時間がないから」という自分の理由では終われません。終われるのは、お客様が満足する最低ラインが完成した時です。学校と現場の違いを体験できるのがインターンシップであり、当社でも運用していますのでみなさんにも参加してほしいと思っています。

レポート／画像35期 村田晋平（4年）



音響設計学科テーマ

そこまで話して大丈夫？開発現場の内側！

語り部：中井雅敏（9期）Vs 宮本則子（16期）

音響設計学科では、入ってまだ間もない1年生から就職活動中の3年生や大学院生まで、およそ30名が集まりました。『座談会』というタイトルにふさわしく、講演者、先輩方や学生たちがざっくばらんに発言し、とても充実した内容でした。

「タイトルにもあるように、ほんとにここまで話しているのかなあ、っていうところまで用意してきたので、そこら



へんはよろしく」と中井先輩がおっしゃり、学生たちが「東芝の企業秘密ってどんなのだろう？」とドキドキする中、座談会は始まりました。

東芝は今年会社創立130周年！だそうです、おめでとうございます。その歴史を、創始者の紹介や会社

組織の成り立ちなどを交え、詳しく話してくださいました。ちなみに東芝の創始者田中久重翁はなんと福岡は久留米の出身だそうです。次は、中井先輩と宮本先輩がこれまでにやってこられた仕事と現在の業務についてのお話でした。どうやらこの「現在の業務」というあたりが、「ここまで話して大丈夫？」などところではないかと興味津々でした。

中井先輩（東芝デジタルAV事業部）の入社当初は、CDプレーヤーの開発に携わっていたとのこと。その後、DVDプレーヤーのフォーマット策定に参画されたそうです。当時、DVDのフォーマット策定には企業間の激しい競争がありました。東芝ではその競争の中、まだ十分にDVDプレーヤーが動くか動かないかの試作段階から、なんとハリウッドの映画会社に売り込みに行っていたそうです。1996年に初のDVDプレーヤーが製品化された

のですが、中井先輩御自身も、発売の3ヶ月前にそれをもってハリウッドに乗り込み、お歴々の前でデモを行いました。発売直前でもあり、まだまだ問題が残っており、そんな状況下でのデモなので苦労されたそうです。そして現在はDVDレコーダーの商品設計、およびファームウェア開発をしているとのこと。昨年開発されたモデルを例に、現在のDVDレコーダ市場の状況などを含めていろいろ説明くださいました。

宮本先輩（東芝マイクロエレクトロニクス）の入社当時は、オーディオ事業部でオーディオ製品の海外生産に関するお仕事をされていたそうです。オーディオやTVなどの要素開発などをやっていたこともあり、いわゆるコンポなどのモード選択で「Hall mode」とか「Rock mode」といった音づくりも担当していました。その後、半導体事業部に異動となり、オーディオ用DSPのファームウェア開発をはじめられ現在に至ったそうです。ICのことは普段あまり話を聞く機会がないので、難しく感じながらも面白く聞けました。ADDAコンバータやMP3プレーヤー、カーオーディオなどに使われている数種類のDSPについて、開発スケジュールなども含めて、話してくださいました。

また、東芝で現在働いてらっしゃるその他の芸工大OBの方々の紹介もありました。現在およそ20名近い先輩方が東芝でご活躍とのこと。そして、今回の講演のために、そのOBにアンケートをとったそうで、会社の長所や短所など、よそではまず聞くことのできない貴重な話を聞くことができました。入社するにあたってのQ&Aなどもあり、これから就職活動を行う学生にとっては、とても重要で励みになるアドバイスとなりました。

最後に、見聞を広めること、丈夫な体と規則正しい生活習慣の大切さ、仕事の面白さ、後輩の私たちへの熱いメッセージで、私たち後輩に将来に対する大きな勇気を与えてくれました。企業説明会などで会社概要を聞いたこともありましたが、今回のお二方のお話はそれ以上に興味と関心の持てるものでしたし、なによりも先輩方の頼もしさを感じることもできました。どうもありがとうございました。

レポート／音響34期 志道 知行（修士1年）

工業設計学科テーマ

芸術工学・それはデザインの再定義

語り部：本山仁（17期）Vs 和田浩一（17期）

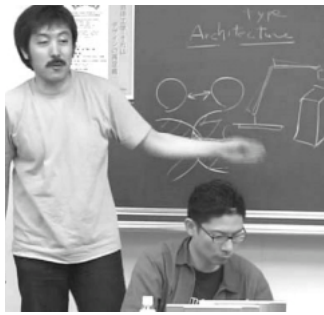
企業の中でデザインの可能性を追い続けている本山氏（松下電工(株)）と、企業を飛び出したフリーランスのデザイナーである和田氏（「STUDIO KAZ」主宰）に講話をお願いした。このテーマは、この数年デザインの業務範囲が広がってきていることを鑑みたもの。狭義のデザインと広義のデザインについて学生と一緒に議論しよう計画した。

「デザインって何ね？5秒で答えて！」と、のっけから本山氏は全員に問いかけた。設計。考えること。カタチ。アジャストすること。思いやり。と、みな多少とまどいながら答えた。さて、答えは何だろうと全員が思いを巡らせたと思う。氏は、「答えはありません」「デザインとは、たえまない言葉の再定義です！」つまり、デザインって何だろうと常に考えることが一番大切なことなのだという。

イタリアのミラノに約5年半駐在し、システム家具の研究・デザインをおこなった経験談を通して、デザインというのは色とか形とかではなく、モジュールやコミュニケーション、生産性を含めたメリット、文化的背景、工学的知識などを含めた総合的な教養をベースとした説得力・知の集大成がないと成り立たないということを教えてくれた。イタリアでも、そしてきっと今でも本山氏の中では絶え間なくデザインが再定義されているのだと語る話であった。

デザインとは笑顔だ

さて、「デザインって何ね？」という問いに対する和田氏の答えは「笑顔」だった。「デザインとはお客様の笑顔です！」と、笑顔で熱く語る姿がとても印象に残っている。誰のために・何のためにこれだけ頭を使ってデザインしているのだろうかと考えたとき、デザインとは、まさに『いまそこにいるお客様の笑顔』だと悟ったらしい。



フリーランスのデザイナーとして手がけた数々のオーダーキッチン事例を、写真を交えて詳しく説明戴いたが、個々のキッチンすべてにおいて細部にわたるデザインに対する強いこだわりがあり、とても興味深く話をきくことができた。たくさんの素晴らしい笑顔がデザインしてきたのだと感じたのは私だけではなかったと思う。

もっと深く、もっと熱く

学生にとって、社会で活躍している先輩の話を直接聞いたことは、とてもよい経験・刺激になったと思う。芸術工学・デザインについて、もっと、もっと深く考えるきっかけにもなったと思う。この企画は今後も継続的にこなうので、是非多数の学生に参加してもらいたい。最後にこの場を借りて本山さん、和田さんに心より感謝の意を表したいと思います。ありがとうございます。

学生を交えた芸術工学座談会〔私の仕事Live版〕は、体力の限界まで続いた。夜の同窓会懇親会 ～ ショップバー ～ 屋台 ～ ファミレス。解散したときには、すっかり日が昇っていた...

レポート/工業20期 藤 智亮 (工業設計学科助手)



総括

統合の年 2003年からはじまった芸術工学座談会。2005年は『私の仕事Live版』として すこし気軽な装いにあらためました。6月4日の午後、環境・工業・画像・音響の4学科OBをお招きしてそれぞれに開催。一部の役員から「4学科の同時開催は、いろんな学科の話を聞きたい人にとって不親切では」との意見もありましたが、行事としてのインパクトや広報の効率などから、敢えて、同時開催に踏み切りました。

事前の広報活動は十分とはいえなかったのですが、それでも全体で100名程度の在学生の参加がありました。うれしかったのは、昨年度の座談会に来てくれた2年生(昨年の1年生/九大1期のみなさん)が、今年も"当然のように"参加してくれたことです。毎年この会を継続し、渾沌会の名物行事に育てたいと思っています。

役員会では、すでに2006年の計画に着手しています。今度は6月3日(土曜日)に実施予定で新卒の方をはじめ、多くの方に来ていただけるように、広報を重点目標にします。なお、芸術情報設計学科のみなさんには、大変、お待たせしました！2006年からは『芸情OBも含めて5学科同時開催』の予定です。ご期待ください。

ところで、話題提供者の人选・調整が現在進行中です。卒業式までには決定したく、在学生に「オレの話を聞け」と、一言も二言も言いたいOBの方は、同窓会事務局まで、ぜひご連絡を……。『あの人が、なんか言いたそう』という推薦も歓迎です。

芸術工学座談会運営事務局
河原一彦(音響16期)



熱い想いを語り継ぐ----- 同窓会 自主企画 『芸術工学座談会』

私の仕事「語り部」募集中

●私的デザイン論 ●成功と失敗 ●喜びと苦悩 ●叱咤激励 なんでもOK。
詳細は同窓会事務局までお問い合わせください。同窓会ホームページ(下記アドレス)にてお問い合わせの際は、氏名・出身学科・入学期をお書き添え下さい。

<http://www.alum.design.kyushu-u.ac.jp>

<芸術工学座談会>は芸工大の創立記念日に

●活動テーマは役員の若返りとホームページ

今年度の事業計画のポイントは、本部 各支部とも『若年層の取り込みと交流の活性化』。会員相互の交流を促進するホームページに関して、本部は『リニューアル』、各支部は『内容の拡充』を柱にしています。

●<芸術工学座談会>は芸工大の創立記念日に

本部は、会計年度及び総会開催時期の見直しを発表しました。これは統合による学祭開催時期の移行に伴い、かねてから検討を重ねていたものです。現段階では「今後の事業の大きな柱である<芸術工学座談会>を、芸工大の創立記念日に開催したい。同時に会員への便宜も図りたく、総会はこれに併せて開催したい。総会では会員への監査報告が必要であり、会計年度も従来通りが適切」という結論です。なお、事業の報告及び計画、会計の報告及び予算については、いずれも承認されました。



●財源ひっ迫の抑制と活発な活動費確保のために

会計事情としては「統合に伴い、入学手続きを六本松でするようになり、入学時の会費徴収率が低下した。今年度は入学手続きの書類に、振り込み用紙だけでなくRe Memberも同封し、会費徴収の促進を図ったところ、渾沌会についての問い合わせが多く寄せられ、効果が期待できそう」との報告がありました。出席者からは、財源ひっ迫の抑制と活発な活動費確保のために「広告収入や寄付などによる歳入増について早めに検討するべき」という意見が出されました。これに対し、事務局側からは「Re Memberや名簿への広告掲載や出版事業の可能性などについて検討中」との回答をしました。

●会員名簿と個人情報保護法の施行

名簿の取り扱いに関しては、活発な意見が取り交わされました。事務局側からは、個人情報保護法の施行に伴い

- ・情報流出対策についての現状
- ・名簿への情報掲示選択の趣旨

などを説明しました。これに対し「名簿という情報資産が全く活用できないようになることは避けてほしい。問題ない範囲で積極的に情報が活用できるようにしてほしい」という要望がありました。情報の活用は、事務局を通じて行うこととなりますが、システムティックなルール化を策定中です。

なお、最後に学園祭実行委員より、学祭へのカンパに対するお礼の挨拶がありました。その後、場所を福岡サンパレスに移して、恒例の懇親会を実施しました。

本部役員：川瀬康彰(音響23期)



実践型芸術工学教育研究を目指して 新専攻「九州大学大学院芸術工学府デザインストラ テジー専攻」を平成18年4月に開設予定

1. 専攻設置の目的

九州大学大学院芸術工学府・芸術工学部は、1968年の九州芸術工科大学の設立とともに「技術の人間化」を標榜し、わが国で初めて「芸術工学」の名を冠した教育を実践した伝統があります。技術の基盤である科学と人間精神の自由な発現である芸術を統合する—この古びることのない普遍の理念を受け継ぎ、今後の社会が求める新たな人材像を追求し、特に次の能力に優れたデザインプロデューサーの育成が不可欠だという結論に達しました。デザインストラテジー専攻を目指すのは、本学が長年培ってきた「高次のデザイン教育」の理念を、来るべき社会の要請に適切に、発展させていくことです。

そこでデザインストラテジー専攻は、日本社会が国際競争力の基盤を確立し、持続的に経済発展するために、デザイン分野における新しい型の高度専門職業人である主に以下の能力を有するデザインプロデューサーを育成します。

- デザインに関する専門知識や技能を背景に、各デザイン領域を融合した先導的なプロジェクトを立案し、その事業計画を策定・実施する能力
- 事業の経済性から社会的影響までを配慮し、さらに成果の知的財産化、流通・販売までのデザインビジネス過程を戦略的に推進できる能力

2. 専攻申請の背景

経済産業省の「次世代デザイン人材育成に関するビジョン策定」に関して、日本産業デザイン振興会が平成16年にまとめた資料には、10年後のデザイン市場の飛躍的な発展が予測されており、デザイン制作の中核をなすデザインディレクターとともに、特に戦略的にデザインビジネスを開発・実践する能力を持つデザインプロデューサーの育成が不可欠であることが示されています。

また、社会・産業・事業ニーズに対して、企業自体の競争力を高めるための価値創出・実践を担うデザイン人材の不足とデザイン方法論の欠如が深刻化しています。しかし、日本のデザイン教育は依然としてクリエイター養成を目指す傾向が強く、経営・ビジネスセンスとそれを具現化する能力を結びつけるデザインプロデューサーの養成はまだ不十分と言えるでしょう。

●専門職大学院から新専攻となった経緯

平成16年度から進めてきた本専攻は、当初、高度職業人育成が主であることから専門職大学院（修士課程のみ）で検討が進められました。しかし、文部科学省との折衝の過程で、主に以下の2点の理由から、博士後期課程を含む一般専攻（新専攻）の設置申請に変更となりました。

1) 社会への説明責任

九州芸術工科大学時代から芸術工学教育研究は、一貫して高度職業人教育（高次のデザイナー）をも視野に入れて行われており、これまで有能な人材を多数輩出しています。そこで、同じ芸術工学府に設置されるデザインストラテジー専攻のみが高度職業人を育成することを目的とする専門職大学院とすることは、従来の芸術工学専攻との違いを社会に説明することが難しく、また多くの修了生に対しての説明責任が果たせないこととなります。

2) 博士後期課程の必要性

専門職大学院には、博士後期課程を設置することができません。デザインストラテジー専攻に博士後期課程を設置（平成20年度からの予定）することによって、デザインプロデュースの方法論などを確立するための学問的意義と、デザイン分野における新しい型の高度専門職業人「デザインプロデューサー」の育成に携わることのできる研究者や教育者の養成を担うことが、総合大学である九州大学における芸術工学研究に必要であることが強く求められました。

3. デザインストラテジー専攻の概要

●名称:九州大学大学院芸術工学府 デザインストラテジー専攻(修士課程) ●修業年限:修士課程2年 ●入学定員:20名 ●収容定員:40名 ●開講形式:昼間開講 ●学位:修士(デザインストラテジー) Master of Design Strategy (略称:MDS) ●開講時期:平成18年4月 (博士後期課程は学年進行の平成20年4月予定)

修了要件について

本専攻に2年以上の在学で40単位以上を修得し、修士論文または特定課題についての成果の審査および最終試験に合格した学生に学位が授与されます。

4つの科目群から構成されるカリキュラム

カリキュラムは、基幹科目である「コアデザインビジネス科目」と実践科目である「プロジェクト科目」、それを強化するビジネス基盤科目である「ベーシックデザインビジネス科目」とデザイン応用科目である「アドバンスデザイン科目」の4つの科目群から構成されます。

① コアデザインビジネス科目

デザインを統合し、実践的なデザインビジネス活用の方法論、およびプロデューサーに必要な基本的な資質を修得します。

プロデューサー原論
デザインイノベーション
デザインインテグレーション
ブランドビジネスデザイン
プロジェクトマネジメントデザイン

② ベーシックデザインビジネス科目

デザインビジネスを行う上で不可欠な知識や方法論を修得します。

デザインマーケティング
デザインコンサルタント
デザインリスクマネジメント
デザイン産業事情
デザインベンチャー
ビジネス財務
デザイン知的財産権
デザイン知財国際比較
プレゼンテーション
国際コミュニケーションA
国際コミュニケーションB
インターンシップ

③ アドバンスデザイン科目

専門的なデザイン分野における高度なデザインコンセプトやプロセス、方法論を、実践を通して身につけます。

まちづくりデザイン
建築デザイン
生活空間デザイン
生活文化デザイン
ものづくりデザイン
マシンデザイン
インタラクティブデザイン
リスニングデザイン
デジタル映像デザイン
イベント・展示映像デザイン
グラフィックデザイン
戦略的先端芸術表現

④ プロジェクト科目

学修成果と実務を融合したケーススタディ型の応用演習や実践演習科目を通して、戦略的にプロジェクトを推進するための判断力や実行力を身につけます。

●セットプロジェクト
ユニバーサルデザイン社会創成型プロジェクト
ブランド創成型プロジェクト
エクスペリエンス創成型プロジェクト
コンテンツ産業創成型プロジェクト

●デザインストラテジープロジェクト
デザインストラテジープロジェクトA
デザインストラテジープロジェクトB

連携を重視した履修・研究指導体制

本専攻では、より高い教育・研究効果を実現するために、企業との連携を重視し、共同研究、人材交流を推進するとともに、学内の研究シーズの積極的な公開と活用を図り、さらにデザイン分野における企業ニーズの掘り起こしを支援します。さらに、国や自治体からの協力を得られるような体制を構築します。

また、時代に即した実践的で効果の高い指導体制を実現するために、日本産業デザイン振興会をはじめとするデザイン専門団体や、海外のデザイン系大学との連携を積極的に進め、情報・人材・知識の交流を図ります。

卒業生、修了生の皆様。本専攻の趣旨をご理解頂き、
芸術工学の発展のために、今後ともご支援並びにご協力の程、
よろしくお願ひ致します。

九州大学大学院芸術工学府 教授
デザインストラテジー専攻設置準備委員会委員長
森田昌嗣 (工業5期)



芸術工学研究院長に就任して

平成17年8月の選挙で、何かか狂って、私が研究院長に決まってしまうました。任期は2005年10月1日から2年間です。このわずかな期間に何ができるかわかりませんが、少なくとも芸工院を再び全国区（というよりデザインの世界拠点）にするための足がかりを確保したいと思っています。九大に統合されて残念に思う気持ちは私も同じです。今となっては現場にいるものとして、芸工院を全国区にすれば、九大の中でもその位置づけは確固たるものになると思います。まず当面の課題として今あるのは、以下の2点です。

まずは、『芸術工学府の改組』です。平成15年に21世紀COEプログラムが採択されたことから、平成20年度からはそれを基盤とした新専攻を立ち上げる必要があります。また平成18年度から新たに『デザインストラテジー専攻』が現在の芸術工学専攻とは別に設置されます。このことから芸術工学府そのものを、「技術の人間化」の理念を現代の社会的要請に効果的に対応させながら、根本的に改組する必要性が出てきました。この改組には、文科省の科学技術振興調整費（科技振）で本年度採択された「先導的デジタルコンテンツ創成支援ユニット」の教育プログラムも含み込んでいきます。

2点目は、平成16年度にはやり科技振のスーパーCOEとして採択された「九州大学ユーザーサイエンス機構（USI）」に芸工院が中核となってプロジェクトを進めることです。なぜなら、このコンセプトが「技術と感性の融合」ですから、これはどうしても他の研究院に任せるわけにはいきません。これも助成が終わる5年後には、そのコンセプトを引き継ぐ人材を育成するための新専攻をつくる義務があります。しかしこれは全学的な取り組みとしながら、一方で芸工院が先導役となってアイデアを提案していく必要があると考えています。当面はこの2点を中心に、つまり“技術の人間化”を学府改組による教育研究面と、その成果をデザインストラテジーやUSIなどから積極的に世に出す社会貢献という視点から進めていこうと思います。

2004年に法人化されて以降、大学は運営面での自立を目指して外部資金の獲得に励み、教育研究の質と保証を求めて5年毎の中期目標・中期計画を実施し、またその目標と達成度に対する自己点検評価、第三者による認証評価、さらには教員業績評価などなど様々な取り組みをしていく必要があります。これまで経験のなかったことばかりで教職員一同大きな意識転換を迫られてはいますが、だからこそ芸工院をさらに素晴らしいものにできるよう、皆が一致団結するときだと考えています。今後同窓会のご協力をお願いすることもありますが、どうぞ宜しくお願い致します。



研究院長
安河内 朗（工業5期）



今回も学祭への支援金、ありがとうございました

2005年11月18日から20日にかけての3日間、第2回芸工祭を実施しました。九州大学と統合してはや2年、1年生が週に1日しか大橋キャンパスに来ないという環境変化にも慣れてはきました。が、準備期間中、1年生が大橋キャンパスに来ない日は、さすがに人手不足。『最後の九州芸術工科大学の学生』である3年生は、芸工大の学園祭のすばらしさを少しでも後輩たちに知ってもらおう、そして共に最高の学園祭を創り上げようとひたむきな努力を続けました。

- 17日 前夜祭“NUTS”では夏をテーマにしたライブイベントを行い、これまでとは一味違った学祭前夜を味わうことが出来ました。
- 18日 夜には“DANPA2005”と称したダンスパーティーが行われ、学部外パフォーマーと学生パフォーマーが大いに学園祭1日目の夜を盛り上げてくれました。
- 19日 空間構成企画“創屋”が、多次元デザイン実験棟を、「想像」をテーマに異空間に作り上げ、中でも2階から滑り台で1階に降りたのには度肝抜かされました。また夜には噴水企画“噴水公社”が行われ、映像と劇を組み合わせたコメディを多くの来場者が楽しみました。
- 20日 学園祭最終日にはファッションショー“CBA project”が行われました。多くの観客を動員し、2回公演にもかかわらず見る人の出来ない人が出るほどでした。そして学園祭のクライマックスには“火祭り”が行われました。これまで受け継がれた伝統を重んじ、今年らしい、最高の火祭りを行うことが出来ました。

今年、特に力を入れたのは学科企画。会期中の3日間、“芸工紹介展”と称し、学部外にもっと芸術工学部を知ってもらうために、芸術工学部の学部生・院生・教員の作品や研究内容などを展示しました。画像の脇山真治教授を中心に、教員の協力の下、展示会や研究室開放などを中心に、広報活動の効果もあり、500人もの来場者を迎えることが出来ました。また、新たな試みとしてフリーマーケットも開催し、学部外からの出店者を多く迎え入れました。さらに、九州大学ビジネスサークルBLS九州の主催で福岡に拠点を置くゲーム会社代表者による講演会も実施しました。フライパンでは、野外ライブイベントを開き、模擬店や特設ステージでの格闘技研究会によるプロレスなども大いに来場者を楽しませました。

今年は、例年に比べ親子連れや年配の方など学部外からの来場者が多く、改めて芸工大への関心の高さを感じました。しかし、学部1年生から3年生までの学園祭スタッフによる学園祭企画は、まだまだ学外に知られてないのが現状です。どの企画も学園祭の企画の域を超えており、どこに出しても引けをとらないものです。また来場者からそのような声をいただいております。今後、今以上に芸工祭が学部外に向けた芸術工学の発信基盤となり、学生達の発表の場となれば、芸術工学部のすばらしさをより多くの人を知っていただけると考えています。今年の芸工祭を3年生と共に創り上げ、エンディングに涙した後輩たち。彼等こそは、芸工大の学園祭のすばらしさを体感し、今年に負けないすばらしい芸工祭を創り上げていってくれるものと確信しています。とどのつまり、先輩方から受け継いできた“芸工魂”は今も尚、脈々と受け継がれていることを、報告申し上げたい次第です。

レポート／九州大学大橋キャンパス芸工祭 学園祭実行委員長
工業設計学科3年 佐々木晃洋



昔は雑芸員、今や興行師。それが学芸員の私かも。

諸山正則；工業8期 1982年大学院修士生活環境専攻修了
東京国立近代美術館主任研究官

1982年春卒業以来、東京国立近代美術館の主任研究官（学芸員）を勤めている。昨秋に当美術館で『琳派RMPA』展を開催した。丸谷才一氏が、これを引き合いに企画展の成功にいたる「学芸員たちの自由で創造的な発想に感銘を受けた」という感想を述べていた（12月6日付朝日新聞エッセイ『袖のボタン』）。「美術館の学芸員というのはやりがいのある職業である。第一に美術史学者、第二に美術評論家、第三にコレクター、第四にジャーナリストであり、第五に興行師である。これだけの資格を兼ねて美を相手どる。面白そうだ」と。

近年、美術館では国立大学に先んじて、独立行政法人化に伴う経営の合理化と経営力の向上など、急速な変革を要求されている。官から民への業務委託で効率化を図るべく指定管理者制度や、政府の民間開放推進会議が答申した市場化テストの導入もある。経営感覚への意識の転換や企画運営、普及教育に関わる見直しと質的向上が促進されており、煩雑さを背負いつつ、美術館を取り巻く状況と成果に進展を見せてきているように思う。今秋開館した九州国立博物館の運営と企画、そしてその成果をご覧になれば察して頂けるだろう。

もはや古風な「雑芸員」という呼称ははるか彼方。丸谷才一氏の経営的なニュアンスもうかがわせる「興行師」こそが今日的となりつつあり、かつて「学者」に対して自嘲気味に自称していた「展覧会屋」も真実味・重みを増してきたようである。欧米の『経営と運営の体制が整備された美術館』をうらやましく思う。要するに日本では、学芸員は社会教育や生涯学習の機能を担いつつ、経営的な配慮を重視し、個人的な研究をベースに時代認識を確実視した上で、多角的な視野と現代への提案を明確にするように、何とも雑多に求められているということであろう。

20数年間に公開事業である館内外の様々な展覧会の企画に携わり、相応の成果と評価を得てきた。個人作家の偉業や、伝統から現代へというニュアンスの多様な近代・現代工芸の企画を構築してきた。それらを近年の意識で思い起こすと、特に戦後の社会や生活の動向とより密接に関わってきたという視点で、工芸やデザインがいかに発展し、どのような創造が達成されてきたかを共通して企画の主題としているように思う。

この5～6年は、現代に新たな造形芸術のフィールドとして確立されたアメリカのstudio furnitureの作家たちのリサーチと交流を経て、日本の木工家具の作家やデザイナーらの制作もあわせて、現代家具の企画を発願している。が、経営を含め条件の整備に苦悩しているところである。私にとっては、工芸もデザインも、美術も、芸術という文化や生活にライブな感覚で身近にあり得る、豊かな創造とそれを享受できる根源であり活力である。何よりも、アーティストが生きているから美に楽しい。



OB版

●担当してきた主な企画；戦後にアートやデザインという新たに流入した概念を融合することで、既成を脱して新時代の工芸を創造しようとした新世代作家達の「生活のなかの工芸」展（1995年）や、伝統的な工芸素材を注視・再認識し現代の感覚で「うつわ」をフィードバックさせた動向「うつわをみる」展（2000年）。家具という新たな創造分野を開拓してきた今日の世代の作家らを取り上げ、美術館として初の家具企画展となった「木工家具」展（2003年）、そして「ハウハウス」展をはじめ数々のデザイン企画展を開催しながらいまだ消滅的であった戦後日本のデザインを扱う企画の第一となった戦後プロダクトデザインの革新の旗手「森正洋」展（2002年）など。

特に、私たち以前頃の芸工大世代に馴染み深いであろう森正洋氏は、長崎・波佐見の白山陶器をメーカーに、生産性とデザインの合理性、時代に即応したニーズを的確にとらえた実に多数の食器のグッド・デザインを発表し続けてきた。昨年の無印良品から発表された白い器のシリーズなどは、廉価さと洗練さなどによって、かなり好評らしい。私は、彼らアーティスト自身の創造を理解することが大いに愉快なのだが、それらが今日の社会生活の中でどのように受容され、現代の芸術として認知されているのかを同時代的に検証できる意義を喜びとしている。

綺麗な竹の猛威への関心を高めたかった出店

藤井 義久；環境30期
芸術工学研究科 芸術工学専攻 博士後期課程3年

現役版

2005年11月の学祭で、芸工大のシンボルともいえるくすの木が、竹のインスタレーションに大変身。私が所属する環境保全学の重松研究室のしわざです。私達の参加テーマは、環境に優しい自然美を生かした店舗装飾および安全な食。出店場所はくすの木の近くを選びました。以前の学祭で山岳部が出店し、波平先生のお好み焼きで、知る人ぞ知る名所になったあの場所です。私達のお店は、黒木町の有機農家、四季菜館の食材を使った料理も美味しいとあって、大盛況でした。

店舗の装飾には、福岡県糸島郡志摩町の火山に育ったモウソウチクとマダケを使用。綺麗な竹のインスタレーションは、お客さんに好評でした。なぜ竹を使ったかという、近年、竹林の拡大が全国的に大きな問題となっており、この問題への関心を高めると同時に、その有効利用をしたかったからです。

古くから竹は、支柱などの農業資材、牡蠣や海苔を養殖する漁業資材や、ザルやカゴ、物干し竿など生活資材、あるいは建材に、さらには食用の筍として栽培されてきました。しかし、戦後の高度経済成長期以降、プラスチックやスチール製品の普及、外材や新建材の台頭、外国からの安価な筍の輸入により、竹の利用価値は下がり、竹林の管理が放棄されるようになりました。竹林では、毎年多くの筍が生えて数ヶ月で竹になり、それが隣接する農林地などに拡大します。そして、農林地の竹林化、景観の貧乏、生物多様性への影響などの問題に波及しているのです。



今回、竹を提供いただいた志摩町火山でも同様の問題があり、特に管理放棄されたミカン園の竹林化が深刻な状況です。そこで、数年前から地元有志が竹林を伐り始め、去年からは重松研究室と共同しながら、伐竹した跡地の樹林化の研究や、竹の有効利用などの活動を進めています。今回の店舗装飾の材料はその一環として、放置竹林を志摩町の方々と私達が伐竹したもの。少しでもこの問題に関心を持ってもらえたら幸いです。

情報フライパン

同窓会
事務局より

本部 在学生会は準会員という再認識

本部長：藤田啓晴（音響8期）



ここ10年ほどの間に、名簿の整備や、リメンバーの定期発行といった本部が提供するベーシックサービスが、定着してきました。ホームページも充実してきており、これもその一つと考えるならば、これらをコアとして、さらに充実させることが、会員相互の連帯感醸成に結びつくのではないかと思います。何かあったときに、同窓生同士でどのようにサポートしあえるのか、同窓会活動をどう利用できるのか、この辺をきちんと整備しておく時期がきたと思っています。

各支部においては、若年層の参加が大きなテーマです。関西支部のお花見の会や、関東支部の新卒者歓迎会は、慣れない土地に着任してきた新卒者にとっては、心強いものでしょうし、各支部の活動も、

これらの若い力によって、さらに活性化を期待できるのではないかと思います。本部としても、在学生会は準会員という再認識のもと、3年前より、在学生会に対するサービスを強化しています。その柱が、学科毎の「私の仕事 Live版 芸術工学座談会」です。まだ、3回の開催（学科によっては2回）であり、運営手法を模索しながら、今後、ますますの充実を図るつもりです。このように在学中から、同窓会活動に慣れ親しむ状況を作り、どしどし若い力を取り込んでいくことが今後のテーマの一つだと考えます。

もちろん、これらの活動の基盤となる資金面についても考えていく必要があります。九大との統合によって、一時的に会費の徴収率が下がりましたが、本年度は回復傾向です。昨年度に立ち上げた会費管理のワーキンググループにおいて、引き続き、効率的な徴収法や運用について検討を続けていきます。

関東支部 最大テーマは新社会人とのコミット

支部長：中村強介（画像2期）



当支部は平成4年に正式発足し、自分は2004年10月に支部長を拝命した四代目の支部長です。いわゆる同窓会としては歴史も規模もまだまだですが、しかし確かな一歩を踏み出せていると思います。

さて、私たち新役員は昨年3月に前任の役員から実務引継ぎを行った後、ほぼ月一回のペースで役員会を開催、様々な課題について議論を重ねてきました。そんな中で今年最大のテーマは『新社会人懇親会』の開催でした。ところが準備段階では「一体、新社会人はどこにいるのか?」「連絡方法は?」等と言った議論や戸惑いを感じながらの手探り状態が続きました。



しかし悩み、苦労した甲斐もあってようやくの開催にこぎつけました。11月26日（土）の夕刻、場所は『晴海トリトン』。この施設・エリアは環境8期生の伊奈氏が年月かけて開発から建設・運営管理までのプロマネを担当したものです。彼の好意により懇親会に先立

って『トリトン見学会』と、それにまつわる貴重な『講演会』も実現できました。参加者の反響は大きく、講演ではスケールの大きなプロジェクト開発の苦労話に聞き入り、実際に巨大な模型を目にした時には、一同、感嘆の声をあげた程でした。懇親会の方も新社会人を中心に大いに盛り上がりました。また、2次会にも殆ど全員が



参加するほどの盛況裡に終えることができました。

当日の参加者は総数で約70名。予想を超える参加数で役員一同感激しきりでした。本部・福岡から藤田会長、清須美教授もかけつけてくれ、同期生同士は勿論、先輩後輩のコミュニケーションも大いに深めることができたと思います。やはり同じ塩原の地で学んだ者同士、'初対面'でも同じDNAを持ったどこか気の許せる兄弟のようなものなのでしょう。会の終り頃に誰かがつぶやいた「芸工大は不滅だな」の言葉が印象的でした。今後このネットワークを拡げ、活動を盛り立てていきたいので、会員の皆様のご理解と参加、コミットを切に願っています。

●関東支部HP <http://www.konton.jp/kanto/>

関西支部 新人の積極的参加を促進中

支部長：今村滋（環境12期）



卒業生の皆様、お元気でしょうか。

さて、関西支部の近況をご報告いたします。

関西支部では数年前より若年層の参加率を高めようと活動の軸足を移してきました。その活動の一環で、支部役員が卒業式に参加し関西支部をアピールする機会をいただくなどして、新卒者のうち関西方面に就職される方々の勧誘を積極的に行ってきました。

本年度は2年に一度の総会の年にあたりましたが、昨年4月9日に大阪市内の会場を借りきり、総会を開催（全体で40名）するなかで新卒者歓迎会も同時に催しました。新卒者としても7名の参加者があり大いに盛り上がりました。参加者の皆様にはこの場をお借りしまして、あらためて御礼申し上げます。



<9月2日に、総会にも参加してくれた卒業間もない年代を中心にした「宴会（若者の集う会）」を開催しました。この場にも新卒者4名の参加があり、新たな懇親を深めることができました。

今年3月の卒業式にも、新卒者の積極的な協力をいただけるようなのでぜひ参加し、このつながりを継続できるよう支部として活動していきたいと思っています。皆様のご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

ご報告：関西支部では活動の一環としてホームページを立ち上げました。まだまだ情報が十分ではありませんが、一度覗いてみてください。内容は追って充実させたいと考えていますが、最終的には皆様の特に関西エリア在住の皆様の情報交換の場に成長させることが出来たらと考えています。構成のアイデア等も含め、皆様のご投稿をお待ちします。よろしくお願いいたします。

●関西支部HP <http://kantonkansai.com/>

<総会の企画は会員からも意見聴取してます

会誌編集制作スタッフ募集中!

会員各位からの感謝に加え、手当のオマケがつくアルバイトです。卒業学科にこだわりません。

●問い合わせ先：同窓会HP <http://www.alum.design.kyushu-u.ac.jp/> FAX(092)553-4520（河原）

九州大学芸術工学部・九州芸術工科大学同窓会会報 9

■同窓会事務局発行 2006.1.15

■編集長 佐伯正繁（画像2期）

■取材&写真協力 OB先生他オールスタッフ